

1. 教育事業名 「無人島アドベンチャーキャンプ2019」
～挑戦！ 仲間とともに～
2. ね ら い 「不便」「不足」「不自由」な厳しい生活環境の中で、仲間達と助け合いながら対峙する困難を乗り越えることで、協働や挑戦することの大切さを学ぶとともに、自然、家族、仲間への感謝の念を育む。また、無人島で「生きる」技能を学び、その実践を通して自信を持たせることで自立心の向上を図る。
3. 期 日 令和元年7月22日（月）～7月28日（日） 6泊7日
4. 場 所 国立沖縄青少年交流の家キャンプ場 儀志布島
5. 募集定員 24名
6. 参加人数 24名
7. 参加者内訳 小学生12名、中学生12名（男子12名、女子12名）
（県内22名、県外2名）
8. 講師等
 - ・大城 敏 氏（パドリングガイド漕店代表）
 - ・森 有紀子 氏（海の自然史研究所）
 - ・東江 宗典 氏（潮花キッズクラブ代表）
 - ・浅野 優香 氏（沖縄県立名護青少年の家）
 - ・与儀 早紀子 氏
 - ・真栄城 守信 氏（保健指導：ウォーターセーフティー協会代表理事）

9. 実施プログラム

月 日(曜)	活 動 内 容			活動場所
	午 前	午 後	日没後	
7月22日(月)	泊港から渡嘉敷港へ 開会式 アイスブレイク	班の話し合い 野外炊事研修 ビバークテント設営研修	班での話し合い 装備品パッキング ふりかえり	キャンプ場
7月23日(火)	儀志布島へ移動 (9:30) 大型カヌーにて移動	スノーケリング練習 漁労講習会 食器づくり	ボンファイヤー ふりかえり 無人島での目標設定	儀志布島
7月24日(水)	班別活動 漁労活動、塩づくり	班別活動 漁労活動	ボンファイヤー ふりかえり	
7月25日(木)	班別活動 漁労活動、塩づくり	班別活動 漁労活動	ボンファイヤー ふりかえり	
7月26日(金)	班別活動 漁労活動	ソロ活動準備	ソロ活動 (19:00～翌7:00)	
7月27日(土)	班別活動 ソロ活動ふりかえり 漁労活動	班別活動 漁労活動 分かち合いの集い準備	分かち合いの集い	
7月28日(日)	機材撤収 移動(船) (7:30) 機材片付け	閉会式 アンケート・感想文記入	渡嘉敷港から那覇泊港へ 無人島キャンプ報告会 ～解散～	キャンプ場 那覇市内

10. 事業の様子



大型カヌーで無人島をめざす



調理のために火を熾す



竹竿を用いて釣りに挑戦



釣った魚をさばく



ブルーシートに包まって眠る



ソロ活動で仲間や家族について考える



分かち合いの集いでキャンプを振り返る



閉会式の様子

11 エピソード（アンケート・参加者の感想）

- ・火炊こしや飲み水の運搬をすることで普段の生活の便利さを実感した。
- ・遠く離れた本部から水を運ぶのが重くて大変だった。
- ・互いにアイディアを出し合い、班の活動ができた。
- ・仲間と協力し、助け合うことで1週間を乗りきることができた。
- ・1週間の無人島生活を乗りきることができ、自信がついた。
- ・普段の生活が多くの人に支えられていることを実感した。
- ・途中くじけそうになったが、仲間に励まされ、最後まで頑張れた。
- ・班全員で力を合わせて頑張ることができ、色々な面で成長できた。
- ・協働や挑戦することの大切さを学んだ。
- ・家族のありがたさや仲間の大切さを知った。
- ・日常の便利な生活が多くの人々の関わりで成り立っていることを実感した。

12 成果と課題

（1）成果（担当者所見）

- ・三不（不便・不足・不自由）のコンセプトの下、「困難を乗り越える体験」を重視したプログラムとして募集したことで、多くの参加者が、厳しいキャンプに臨むという心構えができており、全日程を通して意欲的に活動することができた。
- ・無人島という厳しい環境での共同生活を通して、協働や挑戦することの大切さを学んだ。また、自然、家族、仲間のありがたみについて気付くことができた。
- ・全ての班で海水を用いた塩作りを行うことができ、その作業を通して班内のコミュニケーションが促進された。
- ・ソロ活動は自分や家族、仲間等についてじっくり考えるいい機会であった。分かち合いの集いでは、家族や仲間への感謝、便利な日常生活のありがたさ等の言葉が多く出た。
- ・天候等に恵まれ、計画していた全プログラムを参加者全員で実施することができた。1週間の活動を通して各参加者にこれからの日常生活への自信が生まれた様子である。
- ・各班のカウンセラーとの事前協議で今回のコンセプトである協働、挑戦、感謝について説明を行い、それを意識しての活動を促した。ふりかえりでは、子供達の意見の中にこの言葉が多く現れていた。

（2）成果（アンケート調査から）

- ・IKR 検査の事前調査と事後調査（得点範囲 28～168）において、114.5P から 134.5P へ 20.0P 上昇し、その向上に有意差が見られた。
- ・協働・挑戦・感謝についての調査（以下の9つ質問事項に対して、6段階（最もあてはまる…6、まったくあてはまらない…1）で回答するアンケート）を行った（得点範囲 9点～54点）。39.6P から 46.7P へ 7.1P 上昇した。
 - 質問1：新しい友達を簡単につくることができる。
 - 質問2：困っている友達を助けてあげることができる。
 - 質問3：仲間と協力して何かに取り組むことができる。
 - 質問4：みんなのできないような難しいことに挑戦する（挑戦したい）。
 - 質問5：やったことない作業や活動にも積極的に参加する（参加したい）。
 - 質問6：友達よりうまくできないことがあっても、がんばり通す（がんばり通したい）。
 - 質問7：食事をするときには感謝の気持ちをもって食べている。
 - 質問8：自然を大切にしている。
 - 質問9：親や家族、仲間に感謝している。
- ・自立心の向上についての調査（以下の6つ質問事項に対して、6段階（最もあてはまる…6、まったくあてはまらない…1）で回答するアンケート）を行った（得点範囲 6点～36点）。事前調査と事後調査（得点範囲 9～54）において、23.8P から 28.4P へ 4.6P 上昇した。
 - 質問1：衣食住の自分でできることは自分でできる。
 - 質問2：1週間くらいなら家で1人だけの生活ができる。

質問3：最終的には自分で決めて 結果に責任をもつことができる。

質問4：批判的な助言や意見も冷静に受け止めることができる。

質問5：場所や時間に応じて言動を使い分けることができる。

質問6：社会の出来事に対し自分の考えを表明できる。

(3) 課題

- ・事前の現地研修等を行い、各カウンセラーの持つ技術の共有や実際の指導に関する共通理解を図る場が必要である。
- ・水の消費が前年度の2倍以上であった。健康面に十分注意しつつも、水を大切に使用させるために配分量やタイミングを検討する必要がある。
- ・装備品の活用力を高めるため、その精選、各班によるパッキングを行ったが、必要装備品の取り忘れや紛失があった。事前の周知と定物定置の指導強化を図る必要がある。
- ・班ごとの活動を主におきつつも、協働の大切さや参加者全体での一体感をより感じさせるために全体で取り組む活動を設定する必要がある。
- ・この事業を持続可能なものとするために、カウンセラーや施設ボランティア等、スタッフの確保と育成が必要である。

